

『これから求められること…それは』

九州医学技術専門学校 3年

橋口篤史

本学では3年次の5月から4か月間、臨地実習が実施される。先生方や先輩方の話、メディアの情報からイメージした検査技師像と、現場で見た検査技師の仕事ぶりではギャップが大きく、臨地実習を終えた今抱えている検査技師像は大きく変化した。

現場で特に印象的だったことは、検査の自動化であった。検査機器は日々進歩しており、分野によってはAI導入により判定まで機械が実施するようになる時代がいずれ訪れると予想される。しかし、機器が進歩しても検査技師の需要がなくなることはないと思う。

今回、私は臨地実習を経て新たに抱いた検査技師像と、これから先需要が増える分野についてお話ししたい。

『これから求められること…それは』

九州医学技術専門学校 3年

柴山 真子

[背景]

私たちは、臨床検査技師の国家資格を目標に日々勉強に励んでいます。病院実習を通して認定資格を取得されている技師の方が多いことを実感しました。そこで、認定資格の種類と学生、技師の方での認識の違いを調べました。

[目的]

学生と技師の認定資格について認識の違いはあるのか、また、学校や学年での違いがあるのかを知る。また、取得したい資格の上位を占めた認定資格について調べる。

[対象]

各病院と九州内の臨床検査科の学校にアンケートを実施しました。技師会の会員279名、大分臨床検査技師専門学校115名、熊本保健科学大学400名、久留米大学附属臨床検査専門学校132名、九州医学技術専門学校124名、九州大学75名、国際医療福祉大学64名、日本文理大学医療専門学校65名に協力いただきました。

「方法」

アンケートの結果、上位だった細胞検査士、認定超音波検査士、認定輸血検査技師についてインタビューを行いました。

[結果]

学生が将来取得したい認定資格と技師の方が学生に将来取得して欲しいと考えている認定資格に大きな差は見られませんでした。

私が大学院に進学する意味：新世代の臨床検査技師を目指して

熊本大学医学部保健学科 検査技術科専攻 4年

磯口 藍斗

[はじめに]

私は入学後これまで、自身が臨床検査技師として社会に出るといふことに何の疑いももたず、それ故、臨床検査技師としての将来像について特に深く考えることもなく、3年以上もの学生生活を漫然と送って来た。そんな私にとって、卒業研究でのアミロイドーシスとの出会いは、自身の将来と真剣に向き合い、大学院進学を決めるに至るきっかけとなった。ここに感謝の気持ちを込めて、新世代の臨床検査技師を目指して私が大学院に進学する意味を述べていく。

大学入学後、なかなか臨床検査技師としての将来像を十分描き切れない自分がいた。それでも、学年が進み、講義や実習が進む中で、「機械化、更には人工知能（AI）の波さえ押し寄せつつある臨床検査業界の中において、あくまで「人」として活躍していくには何が必要か」という観点から至った私の最終目標は、「広く医科学に精通した臨床検査技師になること」であった。そして、私がこの目標に至るには、大学院進学が欠かせないステップのように思えたのである。

[現状描く臨床検査技師としての将来像]

私自身が将来、一人前の臨床検査技師になるためには、単に技術的側面を充実させるだけでなく、「医療従事者としての確固たる使命感」や「検査業界全体の将来を見抜く力」、そして「後進の指導にもつながる、正確かつ厚みのある医科学の知識」を兼ね備えなければならないと、最近特に強く感

じるようになった。その目標に向かうために、大学院に進学し、アミロイドーシスの研究を通して部門・分野の枠を超えた医科学への本格的取り組みを継続していこうと考えている。優れた研究者・指導者に師事し、患者から、あるいは臨床検査技師のみならず医師、薬剤師も含めた様々な医療職の先輩方から様々なことを学ぶことで自身を成長させ、本当の意味でのチーム医療を成立させうる「専門性」と「他職種共通の医学知識」双方を兼ね備えた「新世代の臨床検査技師」として、社会に大きく貢献できる人材になっていきたい。

「先輩技師の方々との出会い」

熊本保健科学大学医学検査学科 4 年

永倉 優

<要旨>

学生生活において多くの先輩検査技師の先生方との出会いは、自分の検査技師の将来像を考える上で非常に重要と考えられるがそのような機会を得ることは少ない。

私は3年生の時から病院実習や技師会研修会への参加、二級臨床検査士資格認定試験の手伝いなどの機会に恵まれることができ、先輩検査技師の先生方との出会いで学んだことや感じたことを紹介する。

病院実習では、各分野の専門性の高い検査技師の方々から、講義とは異なる切り口で知識を得ることができ、現場での楽しさなどを教えていただいた。

検査技師会研修会では、症例報告や研究結果の報告を聞くことで新たな知識や発表の仕方などを学ぶことができた。さらに、二級臨床検査士資格認定試験の手伝いでは、試験監督の技師の先生とお話しさせていただいたこと、受験される先輩検査技師の方々の真剣な眼差しを見ることで資格受験の必要性について深く考えさせられた。

このような出会いを通して、私が臨床検査技師として働く思いがさらに強固となり、自己のスキルアップに努めるのみならず、医療の発展に貢献するため、症例報告や学会発表、臨床研究に携わって行きたいと考えるようになった。

多くの素晴らしい検査技師の先生方との出会いで、より多くの知識を学んだと同時に、将来、自身がどのような検査技師になりたいのかを知ることができた。

「臨地実習を終えて」

山下 剛史

日本文理大学医療専門学校

【はじめに】

私は、現在大分にある日本文理大学医療専門学校臨床検査学科3年に在籍し、半年後にせまる国家試験に向けて頑張っています。

今回の発表は、臨地実習で経験させて頂いた事から、今後の自分について考える良い機会になったと感じております。

【臨床検査技師へのスタート】

「臨床検査技師」を知ったのは、高校3年で進路を考えるようになってからです。色々な進路を考えては悩むということの繰り返しの中、ある進学会社で行われていた、自分の性格から向いている職業を検索できるアンケートがありました。アンケートに答え、最終的に自分に向いている職業に「臨床検査技師」がありました。それから、職業内容を調べ、両親へ職業を説明することから始めました。その後、養成校を調べ受験に至りました。山口県から一人暮らしをする不安もありましたが、日本文理大学医療専門学校に進学しました。

【臨地実習前から臨地実習】

1, 2年では、まず座学で知識を学び理解することに多くの時間を費やしました。人体の奥深さやまだまだ未知の部分が多くある事に驚くとともに、理解をする難しさを感じていました。

2年生になり、学内実習が多くなると、理解している事を実践することの難しさに苦労しました。主に用手法を行うのですが、基礎的知識と実習における基礎技術の習得、どちらか一方では正確なデータを出す事が出来ない事を身をもって経験しました。

3年になり、いよいよ臨地実習をさせて頂く事となり、しっかりできるだろうかという不安感でいっぱいでした。臨地実習でまず驚いたのは、検査のほとんどが大型の機器を用い行われている事です。特に、細菌検査での機器に驚き、興味を持

ちました。発表スライドの中でご紹介させていただきます。

始めは自動化されている事への驚きや利便性のみが目が行っていましたが、臨地実習を1日1日と経験する中で、自動化される機器だけで正確なデータを出せる訳ではない事に気が付きました。また、機器の出すデータをそのまま鵜呑みにすることもとても危険な事であることも知りました。

この経験の中で、指導をしてくださった先生方の知識に基づく経験の上で判断されている事、経験から予測し次の行動をされている点、瞬時時の判断が求められる場面での判断力など、機器には取って代われない部分があるが、臨床検査技師には最も重要な事ではないかと考えるようになりました。

【目指す臨床検査技師像】

臨地実習が終わり、臨床検査技師に絶対なる！という気持ちがより強くなった気がします。

将来的に、特定の分野だけでなく、どこでも活躍できるような技師になる事、何らかの問題が生じた際、問題を迅速に解消できるような技師になりたいと考えています。それには、今回臨地実習で経験させて頂いた、技師としての経験を多く積み、それを実力にしていく必要があると思っています。とても難しい事だと思いますが、日々努力をしていきたいと思っています。

【終わりに】

今回、このような発表の機会をいただいた事に大変感謝しております。又、今回の発表に関して、臨地実習でお世話になり、またたくさんのアドバイスを頂いた総合病院 山口赤十字病院の技師長様はじめ、技師みなさまには大変感謝しております。ありがとうございました。

連絡先：TEL:097-524-2857
e-mail:miyamotoay@nbu.ac.jp
日本文理大学医療専門学校
臨床検査学科 教諭 宮本綾